

今日の日本 明日の世界



Vol.87

AI導入は
日本にこそ必要

AIなどの技術革新による変化を
課題解決に活かすべき

1. AIによって社会全体の職場は 増える

今AIの性能向上が著しく、AIに仕事を奪われるとして、ハリウッドで作家や俳優がストライキを起こして話題になりました。歴史上、天候不順による飢饉はあっても、技術革新が素で多くの人々が貧困のどん底に落ちたことは一度もありません。逆にみんなの社会生活をより豊かにしてきました。何故なら、技術革新

2. 新たに生み出される需要の見極め が必要

仕事が失われるパターンは色々あります。AIのような技術革新でな

実際に見極めるとなると難しいです。しかし不可能ではありません。具体的には従来の雇用を排除しそれに代替した新たな技術・方式が生み出す付加価値がどこに配分されるか、裏を返せば消費されるかを見ることが必要です。例えば、技術革新で新たに生まれる付加価値が高齢者に配分されれば、高齢者は家具などのストックは持っているのですが、モノでなくコトで消費することになり、ヘルスケアや旅行などへの需要が増えることになるでしょう。新たな付加価値が若者に配分されれば、若者はまだストックを充分持ち合わせていないでしょうから、モノ消費に向かうでしょう。現在政府が標榜する労働移動の柔軟化スタートアップ支援は、膨大なデータ分析を通して、これらAI・ロボット化の進展で新たに増加する付加価値の配分先を対象にしていくことが求められます。その上で、リスキリングの場の充実を通して、新たなコト消費・モノ消費産業への人材供給をサポートすることが大切です。

3. 日本はAI普及後の姿を世界に 先んじられるチャンス

新たな雇用需要への労働力移動も

は生産性を向上させ、同じ働き手でも従来より多くの産物・付加価値を生む結果、より多くの人々が飢えずに暮らしていける余裕を生み出すからです。結果、昔だったら個人の特技ではあってもそれだけで生活することは困難な職業が立派な職業として自立していきます。例えばスポーツ選手、お笑い芸人などがそうですね。勿論、ローマでは剣闘士が活躍しましたが、ヨーロッパの宮廷ではピエロは支配階級の結束を固める上で重要な役割を果たしましたが、それらは極めて限定的な数で、社会で一般的な職業としての規模には達していませんでした。それが、様々な技術革新で社会の生産力が高まる中で、誰もがそれらを個人の好みに合わせて楽しめるようになり、その職業につく人も増えました。AIの普及で立つべき視点は、新技術の普及を阻止して既存の仕事を守ることでなく、AI導入で余裕のできた労働力を振り向ける新たな産物・サービスを探し、それに正当な値付けを行うことです。

大事な課題ですが、人手不足を解消することも、今の日本には大切な課題です。人手不足は、給与をはじめとした労働条件が悪く、労働者の確保競争に負けることで生じます。この労働条件を良くするために、AIやロボットを活用することを考えていくべきです。今多くのインバウンドが来ても人手不足で、ホテルの客室をフル稼働できなかったり、タクシーも保有車を全て走らすための運転手を確保できない状態です。どちらも、比較的賃金が高いにもかかわらず労働環境が過酷な職場と指摘されています。このような人手不足をカバーするために、AI・ロボットなどの革新的技術や先に挙げたバイキング朝食のような新たなサービス方式などが生み出す付加価値で、この低賃金・過酷労働を緩和できれば、産業間の賃金格差が解消され、誰もが賃金水準を気にせず、自分がやりたい仕事を選べることになり、政府の目指す労働力の移動もよりスムーズになります。

AIの活用によって1台のロボットに多くの機能を付加することが可能になり、今までロボット導入の難点であった初期コスト高を抑えることも容易になる可能性も大にある

く、より良いサービスの提供を目指しての結果の場合もあります。例えば多くの宿泊施設で提供されるバイキング形式の朝食です。元は北欧のバイキング達が獲物を持ち寄った食事形式が、日本に初めて導入されたのは帝国ホテルのランチやディナーでした。背景には、戦後生産・物流が向上して色々な食材が一時に集められることに加え、高級料理をリーズナブルに提供することができるようになったものと考えられます。それが経済成長の進展で人流が増えより多くの人が宿泊し、たくさんの方の食事を提供しなければならなかった朝の忙しい時に、より少ない人数で多くの朝食ニーズを満たそうと、装いを変えてバイキング形式が普及していったのでしょう。結果、従来配膳を担っていた人の雇用は減少したでしょうが、それはバイキング形式の朝食を採用して受け入れ可能となった、より多くの泊まり客がその地域で生み出す、昼や夜の飲食需要、タクシー等での移動需要の増加による人手ニーズに吸収されることになったでしょう。

技術革新やビジネススタイルの改良は新たな雇用を生み出すとの観点で、新たな労働需要がどこで起きているかを見極めることが必要ですが、

と思われる。AI導入を巡ってストを起こす国と比べ、足元での人手不足と未来に向けて確実な人口減少が見込まれる日本は、これから見込まれる人手不足を補うために必要に迫られての形で、AI・ロボットの普及がスムーズに進み、その分これらの導入で増えた付加価値をどこに振り向けるかのモデルケース作りの試行錯誤がしやすいラッキーな国になる可能性が高いと言えます。政府の腰を据えた支援策が重要です。

濱田 敏彰

Toshiaki Hamada

1955年大阪市福島生まれの東京日本橋育ち。東京大学法学部を卒業し、大蔵省(現財務省)に入省。政府経済見通しの作成に始まり、銀行検査官、税務署長、大阪税関長、大臣官房審議官、他省への出向ではジェトロコペンハーゲン事務所長、地方分権推進委員会事務局参事官、東日本大震災の際には消防庁審議官を経験。2015年税務大学校長を締め退官し、現在は経済評論家、関西大学客員教授。



新著
『今日の日本
明日の世界』
(美楽界)



amazon
にて発売中